小説『モン＝ルヴェッシュ』から劇作『家庭の悪魔』へ

── サンドの1852年 ──

吉田　綾

1.

1852年のほぼ同時期にジョルジュ・サンドはテーマも人物設定も非常に似通った二つの作品を創作した．春に書かれた中編小説『モン＝ルヴェッシュ』(1)と，秋にジムナーズ座で初演された二幕物の劇作『家庭の悪魔』(2)である．両作品ともに三人姉妹を登場させ，そのうちの一人に極端なほど陰湿で冷酷な性質を設定している．美人だが，しかし高慢で利己的なこの登場人物はサンド自身の娘で当時24才のソランジュがモデルであろう．多くの評伝においてサンド母娘の不和を語る際に引き合いに出される作品でありながら，これまで作品自体が論じられることはあまりなかった．しかし最近になってサンドとソランジュの母娘関係を従来とは違う視点で見直す動きが出てきた．

フランスでは1994年にベルナデット・ショヴロンが，サンドとソランジュの間で交わされた60通あまりの書簡をもとに，この母娘の関係を心理学的な立場から分析している(3)．さらに1996年にはユトレヒトでファン・ヴィッツェンが同様の研究書を著している(4)．また1889年にモナコの出版社ロッシェから『モン＝ルヴェッシュ』(5)が再版されていることもこの動きの一環とみてよいだろう．

これまでサンドについて書かれた多くの評伝は，作家に肩入れするあまりソランジュを不当に扱い過ぎているきらいがある．ジャン・シャロンもロッシェ版『モン＝ルヴェッシュ』の序文で，ソランジュの性質について，以下のよう

に情け容赦のない説明をしている.

Chaque famille a son monstre, et le monstre de la famille Sand, c'est Solange, la fille de George. Par sa méchanceté naturelle, ses humeurs, ses inconséquences, elle fait souffrir sa mère, son frère, son époux, ses amants, ses amis. Même les bêtes à Nohant n'échappent pas à ce fléau (...)(6)

たしかにソランジュは人格的に問題のあった人物のようだ. しかし, 先に挙げた母娘関係に関する二作の研究書が主張しているとおり, サンド家の不和の原因を娘ソランジュ一人に押し付けることには疑問が残る. つまり, 母親はソランジュより五才年長の息子モーリスを溺愛する一方で, 仕事の邪魔になるからと娘を寄宿舎に「厄介払い」する一面もあったからだ.

このような内輪の事情を別にしても, 『モン＝ルヴェッシュ』および『家庭の悪魔』が興味深い作品であることに変わりはない. サンド作品の大半の登場人物は善良で努力家であるのに対して, 両作品のナタリーとフローラは冷酷で怠慢という正反対の性格づけがなされているからである. この理由として, 『モン＝ルヴェッシュ』と『家庭の悪魔』をソランジュとの不仲を告白し, 娘への不満や非難の思いを表した作品だと位置づけるのが一般的である. しかし私はこれら異色の二作品のうちに, もっと肯定的な執筆意図を探る試みをしたい.

2.

知名度が低いので, まずは作品紹介から始めなければならないだろう. 題名になっている『モン＝ルヴェッシュ』は「ルヴェッシュ山」とでも訳すことができるだろう。物語に登場するある貴族の館とその領地一帯をさす, いわば地

名として使われている。revêcheに「気難しい」だとか「嫌な」という意味があるから，意地の悪いナタリーの性格と関連させていることは明らかである．彼女を長女とするデュテルトル家の二十歳から十六歳の三人娘は実母をずっと以前に亡くしており，父親は四年前に当時二十歳のオランプと再婚している．ナタリーの残酷な性質の犠牲になるのは，この美しく善良な継母である．次女エヴリーヌは継母のことには無関心なため，ナタリーの唯一の味方であると読者に思わせる．しかし物語の終盤で，ある事件をきっかけに若い継母の献身的な愛情を受け入れることになる．末娘カロリーヌは人を憎むことを知らない善良な娘として描かれており，愛する家族が円満にいくようにと心をくだく．しかしその願いもむなしく，オランプはナタリーの精神的虐待に耐え兼ねてついには死んでしまうのである．以下に引用するのは，父親のオランプへの愛情を嫉妬するナタリーの描写である．

(...), Nathalie partit d'un rire nerveux, haineux, horrible à entendre. Ce n'était pas la jalousie injuste, mais excusable, d'une fille qui dispute l'amour de son père, c'était le profonde dépit d'une femme sans cœur qui hait et maudit le bonheur des autres.(7)

ナタリーは他人の幸せを壊そうとせずにはおられない性質なのである．そしてオランプを憎悪の対象に選ぶと，彼女を苦境におとしいれるための策を弄する．『ラ・プティット・ファデット』(1848) や晩年のコント作品(8)では，欠点を克服しながら成長する子供たちの姿が描かれた．また『アンディアナ』(1832) や『棄子のフランソワ』(1848) では虐げられた弱い立場の人間が，最終的には幸せを手にした．しかし，オランプはどんなに家族につくしても報われないのである．

ところで物語の主役は，実は本稿で取り上げているナタリーではない．サン

ドは題名を《Madame Olympe》にするか《Mont-Revêche》にするかで迷っている[9]．モン＝ルヴェッシュにしても，これはナタリー一家の住まいではなく，この家族と関わりをもつことになる別の登場人物の館のことである．ナタリーに割りふられた登場場面も限られている．しかしながら彼女の強烈な性格づけと物語の筋立ては見過ごすことのできない素材となっている．

『モン＝ルヴェッシュ』では天使のように善良なオランプが，理不尽な仕打ちに何ら異議申し立てをすることなく無言で死んでゆく．物語がいわゆる「ハッピーエンド」で終わらないことは注目すべき点であるといえよう．フランソワーズ・ジュヌヴレがその評論を《MONT-REVÊCHE, ROMON MOROSE》と題しているのも，この物語の結末をそれだけ特異なものだと解釈したからであろう[10]．この点についてサンド自身は序論で触れている．

On aime assez, depuis les contes de fées jusqu'aux mélodrames, que le vice soit puni et la vertu récompensée. Pour mon compte, cela me plaît aussi, je l'avoue; mais cela ne prouve malheureusement rien, ni dans un conte, ni dans un drame. (...) Quand la vertu n'est pas plus récompensée dans la fiction littéraire qu'elle ne l'est souvent dans la réalité, l'auteur, eût-il voulu prouver cette énormité, que la vertu est inutile en ce monde, n'en aurait pas moins prouvé une seule chose, à savoir, qu'il est fort injuste et quelque peu absurde.[11]

それまでの作品とは違った傾向の小説を創作しようとしたことが，序文からうかがわれよう．『モン＝ルヴェッシュ』が作品としてどこか未完成な印象を与えるのはサンドが勧善懲悪でもハッピーエンドでもない小説を書くことに不慣れだったことが原因なのかもしれない．

3.

ウラジーミル・カレーニンは劇作『家庭の悪魔』ではフローラという一人の少女に置き換えられたソランジュの分身が小説『モン＝ルヴェッシュ』ではナタリーとエヴリーヌの二人に分割されていると述べている．ナタリーに関しては一目瞭然の内容なので，妹エヴリーヌについての解釈を評伝からを引用しておこう．

Dans la seconde sœur, Eveline, nous reconnaissons d'autre traits de Solange, moins repoussants, plutôt bizarres, et quelquefois même attrayants ; nous voyons devant nous l'autre Solange, l'extravagante, la capricieuse, la mal équilibrée, la dominatrice, (...), tantôt fantasque, adonnée à de folles entreprises, cherchant les émontions violentes, tantôt se mourant d'ennui et de désœuvrement.(12)

ジュヌヴレもこのカレーニン説を採用して，エヴリーヌのうちにも僅かではあるがソランジュの姿を認めている．そしてサンドが娘の分身を二人の登場人物に分担させた理由を次のように説明している．

(...) Sand veut croire que Solange n'est pas toute dans Nathalie.(13)

ナタリーに対しては徹底的に醜悪な人柄を設定しているが，エヴリーヌの場合，性格的欠点ははるかに緩和され，そのうえ知性も魅力も備えている．以下に引用するのはナタリーと談話しているうちに，他人の美点をも悪し様に言う姉に同調出来ず，むしろ辟易するエヴリーヌの描写である．

Elle ne voulut plus écouter une parole de Nathalie ; elle sentait que cette parole était empoisonnée, et elle y résistait comme une bonne et vaillante femme qu'elle était au fond du cœur.(14)

エヴリーヌは自らの軽はずみな行動から周囲に知られては困る事件をおこすのだが，このとき自分を犠牲にして継子の評判を守ったオランプに感謝し，これまでのことを反省する．一方ナタリーは母と妹の間に秘密があることを利用して，父親がオランプに対して疑心を抱くように仕組む．ソランジュを想起させる要素が登場人物二人に割り振られているとするカレーニン説の是非はともかく，この二姉妹に末娘カロリーヌを加えた三人姉妹の構図はいわゆる陳列ケースを思わせる．終始オランプを苦しめ，死にまで至らしめてしまったナタリー，途中で改心したエヴリーヌ，献身的で純真なカロリーヌという三タイプの人物を読者に提示して比較検討させようとしている教育的配慮が感じられるのだ．その読者として，サンドは第一にソランジュを意識していたのではないだろうか．

4．

前章ではサンドがソランジュに対する何らかの教育的意図をもって，『モン＝ルヴェッシュ』の人物設定にあたったのではないか，という仮定にたどり着いた。実際にサンドは，高慢で自己中心的だったソランジュの性格矯正につとめてきたと言われる．ショヴロンによると，作家は15才の娘に『モープラ』(1837)を読ませている．以下に挙げるのは，ソランジュが寄宿舎からサンドに書き送った読後感想である．

J'ai fini《Mauprat》. J'en suis enchantée. C'est le plus beau

roman qui ait jamais été fait. (...) Edmée est la plus belle de toutes tes filles. Moi je suis la plus mal faite.(15)

ソランジュが成人してからのサンドとの確執はよく話題になる．しかし，書簡を読むと少なくとも少女時代の彼女の関心事の第一は母親の愛情を得ることにあったことがうかがえる．一家の主として，職業作家として，また多くの芸術家たちのパトロンとして多忙をきわめたサンドである．母親の注意を自分に向けさせようと，独占欲の強い子供が問題を起こしたとしても不思議はない．また逆に，結果はどうあれ母に気に入られるような，サンド作品に登場する理想的な資質を備えた人物に近づきたいとも願ったことだろう．サンドはソランジュの心理をわきまえていたに違いない．コンシュエロやエドメを例にとって，娘に勤勉や誠実を説いている．ソランジュは母親の作品を『モープラ』に限らず読んでいたと言われる．この習慣は，ずっと後のサンド作品についても称賛や非難をあらわした文面が残っていることから，ソランジュが大人になっても続いたようだ．これらの事情を踏まえると，年令的には既に成人していた娘の再教育を念頭においた物語をサンドが創作したと考えてもあながち間違いではないのではないだろうか．

話を『モン＝ルヴェッシュ』に戻そう。二十歳のナタリーは自分は大人と自認し妹たちを軽蔑しているところがある．心を開いてオランプを受け入れるよう諭す父親に向けたナタリーの言葉を引用しておこう．

Voulez-vous m'imposer un ridicul? Ce que je hais le plus au monde, c'est de faire l'innocente de quinze ans, quand j'en ai vingt par le fait et quarante par le caractère.(16)

ナタリーは決してオランプを maman と呼ばない．せめて Olympe と呼ぶよう頼む母親に対して ma belle-mère や ma chère madame を用いて距離をとる．

新しい母親をどうしても受け入れないナタリーは，三人姉妹の中で最年長ではあるが精神的には未成熟だといえる．父親の妻の座に実母とは別の人間を見るのが我慢ならないのである．次はナタリーが妹エヴリーヌに語る台詞である．

——(...) il y a une cause de trouble qui nous atteint déjà, et qui nous forcera d'éclater tôt ou tard. Cette chose fatale, ridicule, mais insurmontable dans notre destinée, c'est l'amour de notre père pour une autre femme que notre mère.(17)

この言葉にエヴリーヌは驚く．実母を亡くしたときナタリーはまだ四歳で，現在その記憶や情愛があるはずがない．しかも父親はその後十二年間も独身をとおしたのだから，もう再婚のことで責めないで欲しいと言う．

いわゆるナタリーの「子供っぽさ」は劇作『家庭の悪魔』のフローラのうちにも見られる．物語の舞台はイタリアで，両親のいない三人姉妹は音楽教師の援助のもとで暮らしていた．次女フローラは歌手として舞台に立っているが，同じ歌劇場で歌う妹カミーユの才能に嫉妬する．周囲の誰からも注目されなければ気がすまないフローラは，ある富豪のパトロンの誘いにのって家を出てしまう．戻るよう懇願する妹にフローラは理不尽な条件を出す．カミーユを慕う誠実な侯爵の愛を拒絶するよう要求するのだ．

FLORA : (...) Tu veux que je retourne avec toi ?
CAMILLE : Si je le veux ! Ne le veux-tu donc pas aussi ?
FLORA : A une condition : tu ne permettras pas à cet homme de t'aimer; il ne te parlera plus, tu ne le reverras jamais.
CAMILLE : Est-ce sérieux, ce que tu demandes là ? Quelle folie ! Tu crois donc...?

FLORA :　Camille, tu hésites, tu l'aimes !

CAMILLE : Comment pourrais-je déjà l'aimer ? Mais, si cela était, le sacrifice aurait quelque mérite, et je serais heureuse de le faire pour te sauver.

FLORA :　Avec ou sans mérite, fais-le donc, je l'exige.(18)

フローラの態度は家庭にあって暴君的とも言える．しかし大人になりきれていない「駄々っ子」の我がままと見ることもできる．彼女をかばい，なだめるカミーユと姉・妹の本来の役割が逆転している。この構図は『モン・ルヴェッシュ』のナタリーとカロリーヌの関係と酷似している．その意味でもサンドの1852年の二作品は成人した娘ソランジュを意識した教育的側面をもっているのである．

『モン＝ルヴェッシュ』における教育的要素として，さらに指導者の存在が挙げられる．脇役ではあるがブロンドーという人物が作品の終盤で登場する．デュテルトル家がかかりつけにしている医師で三姉妹を生まれたときから知っている，という設定である．彼だけがナタリーに対して厳しい態度をとることができる．以下はブロンドーの訓戒の言葉である．

— Vous êtes mauvaise, vous abusez de votre esprit, vous êtes jalouse, de votre belle-mère, et, en croyant la faire souffrir seule, vous tuez votre père à coups d'épingle. (...) Le mal que vous ferez retombera sur votre tête, et moi qui vous aime et vous plains encore, à cause de vos parents, je deviendrai votre ennemi implacable et ferai hautement connaître le serpent qui mord ici tout le monde.(19)

シャロンはサンドとソランジュの母娘関係を踏まえて，父親デュテルトル氏

を Sand au masculin と位置づけている．しかしその役割にはむしろブロンドー医師のほうがふさわしいのではないだろうか．国会議員のデュテルトルは人格も社会的地位も申し分のない人物であるが，ナタリーに対しては腫れ物に触るようにしているだけの無力な父親だからだ．ところでサンドは晩年，孫娘の教育のために童話を創作した．デブラ・リノヴィッツ・ヴェンツはその研究書(20)のなかで，サンドが年少の主人公たちに両親とは別の指導者を用意していることを指摘している．二十年後の教訓童話特有のメンターが『モン＝ルヴェッシュ』のうちにも存在することは，理不尽な悲劇が多少なりの教育的意図をもって設定されたことの裏付けになるだろう．

5．

これまで見てきたように『モン＝ルヴェッシュ』と『家庭の悪魔』はサンドが娘ソランジュの教育を意識して創作した作品であった．人物設定も状況設定も非常に似通っている．しかしながら両作品に対して読者が抱く印象はかなり異なる．台詞仕立ての後者は余白が多いことにもかかわらず六十ページ程度の小品である．一方，四百ページ近い小説となった前者は本筋とは別にいくつかの挿話を含んでいる．特に目立つのは，それらの挿話にことよせた「身分違いの結婚」や「財産相続」に関わる社会主義的な思想である．

ジュヌヴレはサンドの政治的，思想的立場上『モン＝ルヴェッシュ』が大きな制約を受けながら執筆された事実を指摘している．ルイ・ナポレオンのクーデターから間もない時期だったからだ．原稿が掲載された『ル・ペイ』紙と1852年4月6日に交わした契約でも，作品は complètement étranger à la politique et aux questions sociales でなければならなかったのである．こういった背景からジュヌヴレは次のような解釈をしている．

彼女はサンドの分身を父親デュテルトルでも医師ブロンドーでもなく，オランプに見いだした．共和制への夢をルイ・ナポレオンによって断たれた作家と，

ナタリーに虐げられる母親とを同一視している．オランプは筋の通らない仕打ちに無言で甘んじ，病に倒れてからは呼吸困難にさいなまれる．なるほど主義主張を押さえ込まれてあえぐサンドに重ね合わせることも可能であろう．

さらにジュヌヴレは女性の職業という観点からも一言述べている．実はデュテルトル氏と結婚する以前のオランプは歌手として将来を期待された才能ある女性だった．ところが，結婚するにあたって音楽の道をあきらめた．神経症の病気で死んでゆくオランプは無意識の叫び声を上げる．この苦悩の叫びは才能を生かすことが出来なかった女性の無念の叫び声であると，ジュヌヴレは述べている．

このように『モン＝ルヴェッシュ』は本筋を離れた様々な素材を含んでいる。その内容は作家の思想を知るうえで興味深いのだが，読者の立場に立つと作品が読みづらいものになったことも事実であろう．『アンディアナ』(1832)や『アンジボーの粉ひき』(1845)など社会性の強い作品群の流れをくんでいるとも言える．また，都会の社交を疎み田舎でのつつましやかな生活を賛美するデュテルトル氏の志向は一連の田園小説を思わせる．何百年も生きるオウムが登場して Je vais mourir, je vais mourir! と繰り返す怪奇的要素も見られる．サンド作品の特徴が雑然と並び，それぞれの要素がその場限りで発展しないため作品全体の一貫性に欠ける．

一方『家庭の悪魔』は同じ題材を扱っていても，仕上がりはすっきりと整理されている．登場人物のバランスが計算されており，題名が示すとおりにフローラが主役であることがはっきりしている．結末は奇異をてらったものではないために安易な解決策と考えられるかもしれない．しかし教育的な意図のもとに制作された作品と解釈するならば，フローラが勇気をもって罪を告白する最終場面はきわめて妥当である．

『モン＝ルヴェッシュ』と『家庭の悪魔』の執筆を含む1852年前後は，サンドにとって試行錯誤の時期だったのだろうか．「試験的に」と言ってもいいほど雑多な要素をとりいれた前者の「贅肉」を，今度はそぎ落としてみた結果が

後者となった．『家庭の悪魔』が劇作品であることも意味深い．長塚隆二氏は1851年から1856年を「サンドの《ジムナーズ座》の時代」と呼んでいる(21)．小説も書いてはいたが劇作に没頭し，劇場での上演作品を多数うみだした．結局サンドは小説の道に戻ったわけだが，作家として次に進む方向を模索していたのだろう．教育者的立場も選択肢のひとつにすぎなかったかもしれない．しかし二十年後，現代にも読者を持つ童話群を残したことを考えると，この時期の迂回は無益ではなかったといえるだろう．孫娘たちのために書いた晩年のコント集は教化的な役目も果たしつつ，文学作品として成功している．初期作品に見られた極端な思想やそれを押し通すための不自然な筋立てを避けたからだろう．主義思想が皆無というのではなく，それらの要素は程よく味付けされているから読者を疲れさせるようなことがない．『モン＝ルヴェッシュ』から『家庭の悪魔』への移行はサンドの作家人生のなかで前進とみてよいだろう．

使用テキスト

- George Sand, Mont-Revêche, Œuvres Complètes, t.XXVI, Slatkine Reprints, Genève, 1980.
- George Sand, Le Démon du Foyer, Œuvres Complètes, t.XXXIII, Slatkine Reprints, Genève, 1980.

注

(1) 1852年4月6日から5月8日にかけて執筆．『ル・ペイ』紙に掲載．

(2) 1852年9月1日初演．

(3) Bernadette Chovelon, George Sand et Solange, mère et fille, Éditeur Christian Pirot, St-Cyr-sur-Loire, 1994, 432 p.

(4) Rosalien van Witsen, Une Relation Pervertie: George Sand et sa fille Solange Clésinger, éd. Scheffers, Utrecht, 1995, 300 p.

(5) George Sand, Mont-Revêche, Édition du Rocher, Monaco, 1989,

In-4, 262 p.

(6) Ibid., p.7, Préface de Jean Chalon.

(7) Mont-Revêche, p.60-61.

(8) George Sand, Contes d'une Grand-mère, Edition de l'Aurore, 1992, 2 volumes.

(9) Correspondance, éd. Garnier, t. XI, p.91, lettre à Hetzel, 1er mai 1852.

(10) Françoise Genevray, Mont-Revêche, Roman Morose, dans le bulletin Les amis de George Sand, nouvelle série N° 15, 1994, p.9-15.

(11) Mont-Revêche, p.2, Avant- Propos de l'auteur.

(12) Wladimir Karénine, George Sand, sa vie et ses œuvres, t. 4, 1926, p. 280.

(13) O.P., Les amis de George Sand, p.9.

(14) Mont-Revêche, p.64.

(15) O.P., George Sand et Solange, mère et fille, p.298.

(16) Mont-Revêche, p.41-42.

(17) Ibid., p.52.

(18) Le Démon du Foyer, p.248-9.

(19) Mont-Revêche, p.335.

(20) Debra Linowitz Wents, Fait et fiction : les formules pédagogiques des《Contes d'une Grand-mère》de George Sand, Nizet, Paris, 1985, 299 p.

(21) 長塚隆二，『ジョルジュ・サンド評伝』，読売新聞社，1977.

(博士課程後期課程)